

「そら云ふてたで他の連中が、龜屋の六さんは師匠の内では一番古参やおまへんか、其様事したら六さんが怒りはりますと云ふてた」

「そうやるう、又他の連中に眞似の出来ん節が有るのや」

「その節が邪魔になるねと」

「なにが邪魔になるね」

「イ、ヤ、然うやそうや、彼の人はごしきやと云ふてた」

「ナニ私を越路やと云ふてたか」

「違ふ、ごしきやと」

「ナニごしきてなんや」

「素人の癖に玄人ばつて氣張つて黄な聲を出して赤い顔をして鎗を食ふて青うなるので彼れは五色やと云ふてた、彼様な下手な淨瑠璃はない、宛で豚が喘息を患らふてる様な聲を出してウガ／＼と唸られたら堪らんと」

「オイ次良、私は何も淨瑠璃の太夫さんにならうと思ふて稽古をしてるのんやない、唯人に聽いて貰ふのんを楽しみに遣つてるのや」

「それを聽かされたら災難やと」

「何が災難や、そら吉野屋の常貴は聲は美し、節は美し、淨瑠璃に艶はあるそれは巧いやろ」

「そら常やんと六さんとは一つにはならん」

「私は今度の會には能う出んよつてにそう云ふといて呉れ、お前も稽古をするのんなら男の師匠に習ひ、此頃師匠に好きな人が出来てるで」

「夫れは私も知つてる」

「お前知つてるのんか」

「知つてるとも、夫れは私や、師匠も云ふてはつたで、連中さんも仰山来るけども次良はん貴郎が一番好きやと」

「阿呆、能うそんな事を云ふてるなア、誰がお前へみたいいな男に惚れるもんか、師匠は吉野屋の常貴と好い仲になつてるで」

「そんな無茶な事有るもんか、現在私と云ふ者があるのに」

「まア聞け、師匠處のお父親さんは伊勢屋の三郎兵衛旦那のお供をしてお伊勢参りをして留守や、夫れで私が留守見舞に師匠處へ行って入口を這入ろうとすると話聲が聞こへるのんやア、誰ぞ連中が來てるのぢやと思ふて、表の格子の間から覗いて見ると吉野屋の常貴と師匠と兩人臺所で差向ひになつて一杯飲みながら何やイチャ／＼云ふてるので私は這入らんと其儘戻つて來たんや、處がお前